

テレビ、ファミコン、着せかえ人形等にしか興味を示さなかった子供達が、この日から道ばたの草や木に、少し興味を持つ様になり、散歩に出かけると必ず「これ、なんという花?」「これはなに?」といろいろ聞く様になった。“オオイヌノフグリ”との出会いが子供達に植物に対して目を向けさせ、道ばたの草花を生きているものとして認識してくれた様である。息子小4年、娘小1年——今年も3人でオオイヌノフグリをさがしに出かけた。今、彼等の好きな植物は“オオイヌノフグリ”と“ヘクソカズラ”である。

子供達と散歩をしながら、道路脇や畑、堤防脇等の雑草を見ていて気がついた事がある。それは帰化植物が非常に多いこと。歩きながら目にとまった種類の中で、在来種と帰化植物との割合を求めて見ると、

$$\text{帰化率} = \frac{\text{帰化植物種数}}{\text{全植物種数}} \times 100 = \frac{21}{52} \times 100 \approx 40\%$$

であった。代表的なものは、オオイヌノフグリ・ヒメジョオン・ブタクサ・アレチマツヨイグサ・セイタカアワダチソウ・オオアレチノギク・シロツメクサ・イヌガラシ・ウマゴヤシ・オオキンケイギク等。市街地及び周辺部で一般的に見かける種である。

帰化植物の由来は種類によってさまざまだが、帰化植物の種類数は現在でも増え続けている。日本全体の帰化植物は1930年ごろ（昭和初期）には約150種類であったものが1970年には約800種、現在では1,000種を越えていると思われる。日本列島に自生する高等植物は約6,000種といわれているので、その2割弱にあたる種類の帰化植物が日本の自然のなかに入りこんでいるわけである。前述した帰化植物を山林中に見ることはほとんどない。しかし市街地の空地や道ばたなどでは逆にこれらの帰化植物が非常に目立つ。森林のように日本在来の植物が安定した群落をつくっている所には、帰化植物が入りこめないのに対し、人間の手が常に加わり環境が不安定になっている所では、在来種の勢力が弱まり帰化植物が多くを占めるようになる。舗装による土壌の乾燥とアルカリ化、水の汚れによる富栄養化などはとくに帰化植物に有利な条件を作り出している。こうしたことから、ある場所に生えている植物の種類のうち何%を帰化植物が占めているかを調べることによって、その場所の植生がどの程度自然状態から離れているかを知ることができる。

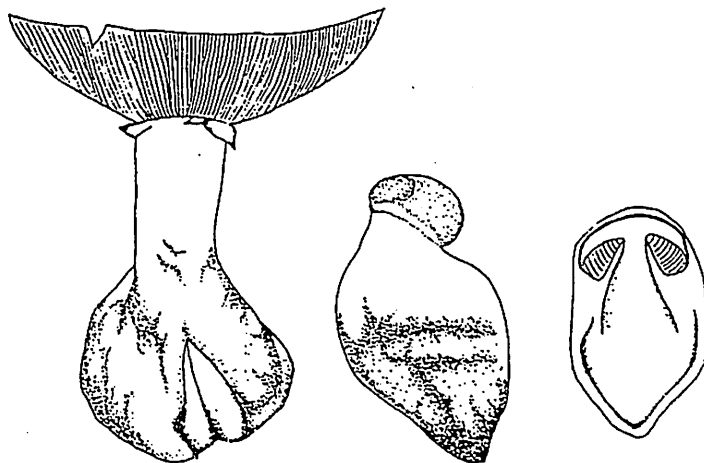
私の家の周辺部で見られた帰化植物は、私の住む環境がいかに自然からへだたっているかを教えてくれた。人口の都市集中が更に進み、市街地が拡大し、高密度化してゆけば植物にとっての住環境が更に悪化し、(人間にとってはなおさらである!) 帰化率が100%となる日が来る。そして、帰化植物すら生育できなくなる日が到来するかもしれない。我々人間は帰化植物ほど環境圧に対する抵抗力が大きくはないはず。

家の前の空き地に生えている雑草を、隣の神社の森を、海岸の砂丘植物をもう一度見つめ直し、考えてみる必要があると、オオイヌノフグリに教えられた気がする。

(引用文献)

- ・牧野新日本植物図鑑 牧野富太郎・北隆館
- ・指標生物——自然をみるものさし—— (財)日本自然保護協会・思索社

(めぐろ しゅうじ (株)グリーンシグマ)



カブラテングタケ *Amanita gymnopus* Corner et Bas
1979.7.29. 加茂山公園内松林で採集
幼菌は固く表面は茶褐色、成長すると傘ははじめ球形～まんじゅう形からほぼ平に開く、茎は非常に固く下部は大きくふくらんでいる。日本では新潟県、鳥取県以外ではあまり発見されていないという。(小林巳癸彦)